



平成 30 年度

上宮学園中学校 上宮高等学校

学校評価

— 学校自己評価書 —

目 次

(頁)

I	上宮学園中学校・上宮高等学校の教育理念	…	2
	A 建学の精神 (mission)		
	B 教育目標 (vision)		
II	学校評価のあり方	…	3
III	各分掌における評価項目と自己評価		
	①教科	…	4
	②学年	…	14
	③コース	…	21
	④進路指導	…	26
	⑤教務	…	29
	⑥生活指導	…	36
	⑦入試対策	…	37
	⑧保健管理	…	39
	⑨教育相談	…	40
	⑩データ処理	…	43
	⑪生徒会	…	44
	⑫人権教育	…	45
	⑬図書・視聴覚教育	…	46
	⑭広報戦略	…	47
	⑮ I D	…	48
IV	総括	…	49

I 上宮学園中学校・上宮高等学校の教育理念

A 建学の精神 (mission)

本学園は浄土宗を母体とし、法然上人の仏教精神を教育理念の根底におき、知育・徳育・体育のバランスのとれた全人教育を目標に「上宮教育」を推進し、実践する学校である。

校訓「正思明行」は、仏教の八正道における正思惟に由来し、中学生・高校生として生徒一人一人が、自らの思惟によって、児童期にありがちであった自己中心的な身勝手な考え方の誤りを明らかなものにし、正していくことによって自らを成長させ、青年として自信を持って主体的に行動することを説いている。また、学順「一、掃除・二、勤行・三、学問」とは、浄土宗の『住持訓』に倣うものであって、掃除とは文字通り身の環境美化を意図するとともに、学ぶ心の準備を意味する。勤行とは学業に専念し精進努力することの価値を説き、それは単なる成果主義の否定でもある。学問は授業そのものに止まらず、人として正しい生き方、つまり、人倫を学ぶことである。掃除と勤行を学問より先に掲げるのは、成績至上主義に陥ることへの戒めであり、学順はその重要性において並列の関係にある。

B 教育目標 (vision)

上宮学園中学校・上宮高等学校の教育目標は建学の精神に基づき、法然上人が説かれた人倫と仏の慈悲の精神を多くの若者に分け与えることである。

時代の波が変化しても、建学の精神をもって人間道の目的理想を見つめる正真の眼を育て、また、理想に向かって励み進む剛健の足を育てることが本校の使命である。

教育の三本柱は「知・徳・体」の育成であるが、「上宮教育」はこの三本柱のバランスを重視している。その中でも、知・体に偏らず、他校ではできない心の教育の実践を目標とする。それは知識・学力の向上だけではなく、総合的な人間力を向上させる教育である。長い人生の礎を築くことこそが学校本来の役割であり、上宮の本旨である。

Ⅱ 上宮学園中学校・上宮高等学校の学校評価のあり方

2007 年の改正学校教育法において、学校評価の実施・公表に関する規定が整備された。それには 1 年間の学校の取組を振り返り、自校のよさや特色、生徒の成長等を確認し、より一層の充実に向けて改善の方向を明確にするために実施することが記されている。また、評価結果を外部に公表し、保護者や地域の人々に生徒の成長・教職員の努力等を理解してもらい、学校への信頼を確かなものにしてもらうことが謳われている。

本校には「上宮学園中学校・上宮高等学校の基本理念と学校方針」があり、上宮教育の根となる「建学の精神」、茎となる「教育目標」、そして枝、葉となる「戦略・戦術」、「計画」が説かれている。上宮教育において、根と幹は揺るぎないものである。

各分掌・組織は「建学の精神」と「教育目標」を基礎としながら、有効な手段を用いて上宮教育を推進・発展させていく必要がある。そのため、年度毎に各分掌・各組織の現状を把握・認識し、自ら評価を下し、その反省の基に新たな課題と目標の設定を行わなければならない。この作業は本校の「戦略・戦術」の構築と実践であり、将来を見据えた「計画」のもとに行われるものである。それは上宮という木に光を当て、根や幹に栄養分を送るという重要な役割を果たすことになる。すなわち、枝振り（枝葉）はこの先に形を変えながらも、太く逞しい根や幹をもつ上宮という木を育てるのである。これが本校の学校方針である。したがって、本校にとって学校自己評価とは、「戦略・戦術」の構築・実践・改定を世に明らかにするものと捉えられる。

我々はこの作業において各分掌・組織のあり方を認識し、その中における自己の役割を認識する。それは教育職としてのスキルアップへと発展すべきものである。今後、我々は上宮のあるべき姿、すなわち未来を共通に認識することで、「個」の力を「組織」の力に変えていくのである。

Ⅲ 各分掌における自己評価

①教科

平成30年度教科（国語科）

評価責任者名（金安克之）

分掌目標	国語力—コースの目標に応じた入試に対応できる力だけではなく、生涯を通して生きる力の基礎となるもの—の充実	
	重点課題	評価 成果と課題
①	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的国語力の充実を図る。 ・授業の厳正化を図る。 	<p>各コースの特徴を考えた、計画をたて、それを実行できた。</p> <p>”</p> <p>”</p> <p>”</p> <p>”</p>
①	<p>学力推移調査・模擬試験の全体把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結果分析と対応策の検討。 	<p>担当者においての分析・検討はされているが、全体として共有まで出来なかった。</p>
②	<p>教科会の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の共有 → 定例化 	<p>定期的に教科会を開いた。Classiにも情報を掲載した。</p>
③	<p>補講習の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全教員（専任・常勤・非常勤）が全学年で実施 ・コースの教育プランに基づいた（コースからの要請のあった）補講習が実施できるよう取り組む。 	<p>前年度とほぼ同じで、担当者次第であったことは否めない。</p>
④	<p>漢字検定・日本語検定の対策と活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒への広報の徹底 ・漢検において、過去問に対して積極的な取り組みを促すことにより、合格率の向上を図る。 	<p>全員受検ではないので、なかなか指導が徹底できなかった。</p>
⑤	<p>教育プランとシラバスの改訂</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前年度作成した〈教育プラン〉と〈シラバス〉を、現状に合わせて改訂していく。 	<p>採択教科書の変更に伴い、令和元年度に改訂を実施する予定。</p>

分掌目標	・ コース別（受験形態別）指導の確立		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
① 学力推進プランの検討について <ul style="list-style-type: none"> ・ 現状分析（授業内容を含め） ・ 3 ヶ年及び6 ヶ年におけるコース別推進プランの検討 ・ 高大連携を踏まえたプランの検討 ・ 国立コースのカリキュラムの検討 	A	各コースの特徴を考えた、計画をたて、それを実行できた。	
② 定期考査、模試の利用と活用について <ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な目標値の設定 ・ 分析と検討・対策 ・ 生徒指導への活用 	B	科目ごとに検討したうえで、定期考査を実施した。	
③ シラバスの検討について <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力推進に基づき、3 ヶ年・6 ヶ年それぞれのシラバスについて授業を展開しながら検討する 	B	シラバスに沿って授業を展開できた。	
④ 教科会について <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科会への全員参加 ・ 会議の定例化 ・ 教員間における情報の共有化 ・ アクティブラーニング等の研修 	B	(行事・主張等により)、教員の研修の場としての教科会を開けなかった。	
④ 補習・講習について <ul style="list-style-type: none"> ・ 各コースの特性を考えての実施 ・ 実施内容の検討 ・ 学年・コースを超えた講習の実施 	A	各科目の特性にあった穂講習を実施できた。	

分掌目標	・ コースに応じた学習プランを作り学習効果を挙げる		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
⑤ 学力推進プランの作成について <ul style="list-style-type: none"> ・ 現状分析（授業内容を含め） ・ 3 ヶ年及び6 ヶ年におけるコース別推進プランの作成 ・ 高大連携を踏まえたプランの作成 	B	4 月の段階でだいたいの年間計画は立てられるが、年度により生徒の能力に差があり計画通り進むことができない。	
⑥ 定期考査、模試の利用と活用について <ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な目標値の設定 ・ 分析と検討・対策 ・ 生徒指導への活用 	B	教科書は終了することで精いっぱいになかなか模擬試験対策までの授業が展開できない。	
⑦ シラバスの作成について <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力推進に基づき、3 ヶ年・6 ヶ年それぞれのシラバス作成 	B	各先生方の協力によりそこそこのものができあがった。あとは実践に基づき改良していきたい。	
④ 教科会について <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科会への全員参加 ・ 会議の定例化 ・ 教員間における情報の共有化 	B	各先生方は講習、その他の公務を優先されているので、全員参加教科会が開けていないのが現状である。	
⑤ 補習・講習について <ul style="list-style-type: none"> ・ 全学年、各コースでの実施 ・ 実施内容の検討 ・ 学年・コースを超えた講習の実施 	B	どの先生も積極的に普段の講習はもとより、休暇中の講習もしていただき効果はできていると思います。	

分掌 目標	理科の教員間での情報の共有化をはかる。 授業の充実をはかる（実験も出来る限り取り入れる）。		
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
①教育プランの作成に向けて （作成にあたり配慮すべき事項） ・現状の問題点の把握 ・新学習指導要領「理数教育の充実」をはかる ・各コースの特色をいかす ・模擬試験等の活用を図ること ・生活適応力の養成を心掛けること ・教員の仕事の分担を配慮すること		B	昨年度分の再検討をするにとどまっている。
②シラバスの作成に向けて （作成にあたり配慮すべき事項） ・教育プランを基にすること ・授業担当者間で相談し、弾力的に運用する		A	授業進度・深度について、各学年・各科目担当者間での連絡は密にとり、検討できている。
③模擬試験等の結果把握に向けて ・試験問題の結果等の分析と対応の検討		B	各担当で実施している。
④教科会・情報交換会の活性化に向けて ・各学年・各科目担当者間の連絡を密にする ・会議・打ち合わせ内容の徹底		A	定例的に教科会は実施した。
⑤補講習の充実に向けて ・補講習実施を前提とした授業の配当 ・補講習内容の検討 ・補講習が効果的に実施できるシステム作り		B	7時間目の講習は、高3英数コース・パワーコースの物理・生物だけになったので、本来の講習を充実させていきたい。
⑥教員の教育力向上に向けて ・各種研修会への積極的参加		C	授業や担任業務のため、なかなか出張に出れないのが現状である。
⑦授業の充実に向けて ・生徒の意識付け ・基礎学力の定着 ・応用 ・授業内容に最新科学情報の盛り込み		B	各科目で授業ノートをつくり、授業内容を統一するようにしている。少しずつではあるが、成果は出てきていると思う。
⑧実験授業の充実に向けて ・実験設備の管理計画の立案		B	授業内容やコースにもよるが、積極的に取り組んでいる。
⑨人権意識の涵養に向けて ・障害者等に対する配慮する（光、音、遺伝等）		A	授業時の表現には、細心の注意を払っている。

分掌目標	生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに体力の向上を図る。また規律ある態度を育てる。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
選択体育の内容の充実と研究	B	場所と人数の関係により、十分か活動が困難なこともあるが、各種目、創意工夫により効率的に活動できている。	
安全に留意し怪我、事故の無い授業をすすめる。	A	大きな怪我もなく、環境や生徒の状態に注意して授業が進められた。	
規律ある態度の育成と活気のある授業を目指す。 自主的に授業に参加する態度を育てる	B	生徒主体で進められる授業の工夫がもう少し必要である。 試合等については積極的に参加し、活気ある授業がおこなわれている。	
体力の向上を重視し、健康や体力の状況に応じて体力を高め、生涯にわたりスポーツを楽しむ態度を育てる。	B	種目の多様化により、生涯スポーツとしての経験が出来ている様に思われる。 これからも、スポーツを楽しむ習慣を身に着け継続できる態度を育てていく。	
教員の資質向上 ○ 教材研究の徹底。 ○ 教員間の情報交換。 ○ 研究会・講習会への積極的参加。	C	選択授業の専門性だけでなく、各種目の研修会等に参加し、幅広く知識を広める必要がある。	

分掌目標	英語力向上の取り組みと実践教育。文科省発表 2020 年から実施される新テストや外部試験への取り組み等の情報収集、アクティブラーニングの模索		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
<p>英語学力の向上</p> <p>正しい発音の認識と音読指導</p> <p>英語に対する興味付け</p> <p>単語テスト・既習事項の確認テストの充実</p> <p>宿題・課題・補習の充実</p> <p>修学旅行の事前学習</p>	C	<p>○各担当者が授業において音声教材を使い、</p> <p>正しい発音の認識と音声指導を行った。</p> <p>また小テストを通じ、単語や既習事項の確認を実施した。</p>	
<p>資格試験の情報提供</p> <p>実用英語検定の情報提供</p> <p>第 1 回；1 次筆記 6/3(日)</p> <p>2 次面接試験 7/1(日)・7/8(日)</p> <p>第 2 回；1 次筆記 10/7(日)</p> <p>2 次面接試験 11/4(日)・11/11(日)</p> <p>第 3 回；2019 年 1 次筆記 1/27(日)</p> <p>2 次面接 2/24(日)・3/3(日)</p>	C	<p>○G テック受検 4 技能版を国公立コースにて実施し、Step Up ノートを早めに配布した。</p> <p>○多くの生徒が英語圏手を受検し、そのための面接練習や講習も実施された。</p>	
<p>大学入試「新しいテスト」の情報収集</p> <p>高校 1 年の大学入試時より導入予定の「新テスト」や英語外部テストについての情報収集と英語科教員共有化</p>	D	<p>○「新テスト」の情報が徐々に明らかになってきたが、生徒・保護者に伝達する方法が確立できなかった。</p>	
<p>アクティブラーニング導入への実施に向けて情報収集と研究授業等、実践報告の共有化</p>	D	<p>○各担当者がそれぞれに取り組もうと努力しているが、こなしていく内容と時間数との兼ね合いから、生徒に時間を与えることが難しいことも多く、手探り状態が続いている。</p>	
<p>英語科教員間における情報共有化とその利用</p> <p>教科内の授業担当者同士の情報共有・充実</p> <p>共有化した情報の利用方法の検討</p>	C	<p>○共有フォルダの利用や、ほぼ月 1 度の教科会議を持つことで、教科内の対話や情報の共有化を実施した。</p>	

分掌名（ 芸術科 ）

評価責任者名（ 堀田泰彦 ）

分掌目標	個性豊かな表現と、鑑賞の能力を伸ばし、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
芸術を親しみそれを愛好する心情を伸ばすようにする	B	高校1年次のみの実施のため、基礎的内容から、それを活かした応用へ移ることが難しいので、工夫が必要である。
芸術への関心を高めるよう内容を構築する （生徒の制作意欲を高める工夫をする。）	B	生徒の創作意欲の湧くような内容を検討していく必要がある。
表現及び鑑賞の能力を高める指導の充実を図る	B	制作などに時間をほとんど費やすため、鑑賞の時間をつくる工夫が必要である。（1年間の実施のなかで、いろいろ対応しなければならないことが多く、難しさを感じる。）
教科会の活性化及び各学年コース・中高担当者同士の情報交換の活発化	B	情報交換は出来ていると思う。
各担当者の授業の実施方法について教科内の連携を図る	A	各科目の担当者どうしでの連携は、概ねとれていると思う。
共学化により、指導上において男女生徒への指導の仕方に差が出ないように注意する。	A	概ね出来ていると思われる。
その他 評価について	A	各教科にて共通の5段階の評価基準を設けることが出来た。

分掌目標	授業で生徒のプレゼン能力の育成を図る指導をする。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
生徒のコンピュータのスキルが向上するように指導する。	B	入学してくる生徒はスマートフォンなどのスキル、知識はあるが、コンピュータのスキルなどは不十分である。 しかし、情報科の指導でスキル、知識とも向上している。	
情報モラルの指導を徹底する。	B	近年スマートフォンによるSNSなどの問題 が多数発生し、情報モラルの指導は多くの時間をとって指導しているが、家庭での教育も必要であり、保護者への講習等も必要である。	
生徒のプレゼン能力の育成を授業内で行う。	A	授業でプレゼンをさせる機会をなるべく多く とり、生徒はプレゼンの経験をすることによって自己表現が豊かになった。班ごとに教員からコメントを手書きするなどきめ細かな指導 が出来た。	
詳細な年間指導計画を作成する。	B	例年通り詳細な年間計画を立てることが出来た。	
教科内の連携の強化を図る。	C	個々の教員に制約があり、教科内で連携をとり、指導内容、授業進度などの打ち合わせを十分行うことが出来たとは言えない。 今後は他教科との連携も必要であると考えている。	

分掌目標	宗教の授業で「釈尊」や学校祖「法然上人」などの宗教的偉人の生涯とその思想を学び、宗教行事（合掌の姿勢・態度）を通じて宗教情操の涵養に努める。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
1、各学年における授業内容の検討 ○ 授業の進め方の協議 ○ 授業内容及び進捗状況の連絡	C	授業の進め方：頻繁に協議する機会は少なかった。進捗状況：授業担当者同士が互いに把握は出来ていたが進捗はなかった。	
2、教材研究 ○ 参考資料の検討 ○ 教材プリントの作成 ○ 教授資料の共有	B	参考資料：担当者が各自工夫。 教材プリント：担当者が各自工夫。 資料の共有：学年及び単元によって共有する資料の数量は変わってくる。概ね良好。	
3、宗教行事について ○ 宗教行事における事前指導 ○ 行事関係部署との連絡・協議	B	事前指導：関係部署の御協力で納得のいく指導が出来たように感じる。本校の宗教行事は他校より少ないが、行事数を増やすより、その質を上げて行きたい。	
4、教科会の開催 ○ 月1回程度の定期的な開催 ○ 教科内での意見交換・情報交換	B	月1の教科会：理想的ではあるが、実際は困難である。情報交換：思っている以上に新鮮な情報を持っていることが多々ある。次回は意見・情報交換を活発に行いたい。	
5、宗教教育と道德教育 ○ 宗教教育と道德教育についての研究 ○ 宗教教育と道德教育の実践・推進についての検討	A	本校は宗教教育を行っているが、道德教育の項目にも対応する必要がある。	
6、老人福祉体験学習 ○ 実施施設との連絡・協議 ○ 学習内容の検討	A	施設との連絡・協議：実施施設と本校の関係は良くすべて遺漏なく実施できた。学習内容は実施施設のおかげで年々改良されている。	
7、ボランティア活動への参加 ○ ボランティア情報の把握・収集 ○ 災害などの募金活動 ○ 寺院・地域への奉仕活動	C	ボランティア活動への参加は、ほとんど実施することができなかった。老人福祉体験学習をいかにボランティア活動に繋げるかが今後の課題として残っている。	
8、宗教関係学校との情報交換 ○ 宗門関係学校との研究会 ○ 仏教関係学校との行事	A	宗門校：宗教情操教育研究会での意見交換も活発におこなっている。 仏教関係校：「花まつり」の行事を中心として関係学校と活発に情報交換ができています。	

分掌名（ 技術・家庭科 ）

評価責任者名（ 結城 薫子 ）

分掌目標	生活に必要な基礎の知識を確立し、生活の自立が出来るように指導する。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
生徒がより理解できるように授業内容を検討する	B	生徒の理解レベルに合わせて授業内容を少し容易に変えたり、プリントなどを用意したりした。
教科内で情報共有，連帯強化出来るよう教科会の開催頻度を増やす	B	非常勤講師の先生の出勤日がそれぞれバラバラで全員で話し合いをする時間が持てなかったため、連帯強化が図れなかった。
教育プランやシラバスの改良	A	成人年齢が下がることを受け、文科省の通達に従い改良した。
教員の教育力向上に向けて研修会等への積極的な参加	C	分掌の仕事が多忙でなかなか研修会に参加できなかったため、今後の課題とした。
実習授業の取り入れに向けて受け入れ施設等の検討	B	新校舎の建設に伴い、実習室の整備計画を策定した。

②学年

分掌名 (高校 3 年)

評価責任者名 (仲谷 達幸)

分掌目標	生徒一人ひとりに寄り添い、生徒一人ひとりの進路保障をしっかりと確立。その視点からの生徒指導と進路指導を実践する。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
① 学年目標の設定 ・学校の教育理念 校訓「正思明行」の具体化 ・学順「一に掃除(心身の保健衛生・整頓済美) 二に勤行(勤労愛好と業務精進) 三に学問(智慧を完成する学問解明)の実践 特に教室の清掃については日々実践の事	A	受験の学年ということもあり、おおむね落ち着いてきている。女子生徒の化粧は相変わらずである	
② 年間行事予定 ・高3オリエンテーション ・保護者対象説明会と学級懇談会 ・コースごとの生徒対象進路説明会 ・卒業式	A	特に問題なく実施している。	
③ 学年運営及び学年会の活性に向けて ・学年会検討事項の事前伝達 ・各コース間の連携 ・各大学の説明会への参加分担	B	大学説明会の参加が、少し消極的か。受験形態が年々変わってきているので、もっと参加してほしい。	
④ 補習・講習に関して ・放課後の補習講習の計画立案 ・夏期休暇前後の補習講習の計画立案 ・冬期休暇前の補習講習の計画立案	A	予備校・塾に行く生徒が多い。自習室があることがメリットみたいである。補習講習は学力の低い生徒が受ける。夏・冬とも約10名程度。	
⑤ 生活指導に関して ・基本的生活習慣の徹底 ・勤務状況の把握 ・「事故」未然防止の指導 ・生活指導部との連携 頭髮一斉指導への協力 ・配慮を要する生徒への積極的な関わり ・全教員が共通認識を持って指導にあたる。	A	3年生になると、要領よく動いてくれる。女子生徒の化粧が気になる。	

<p>⑥ 進路指導に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路指導部との連携 指定校推薦、高大連携入試と A0 入試、公募制推薦についての生徒の理解を得る（しっかりと理解したうえで受験に臨ませる） ・一般入試は後期入試まで諦めさせない。 	B	<p>プレップコースの生徒の学力が気になる。特に英語がひどい。英語が書けないので、エンパワーメントプログラムはできない。来年度は英語を書けるように指導していきたい。</p>
<p>⑦ 学習成績の向上へ向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各コースの特色が生かせる学習指導 プレップ文系 プレップ理系 技能 英数文系 英数理系 パワー文系 パワー理系 一貫特進文系 一貫特進理系 一貫プレップ文系 一貫プレップ理系 ・個人懇談及び三者懇談の実施 ・進路指導 LHR での積極的クラス運営 ・模試成績の結果分析会への参加 ・成績不振生徒及び保護者の召喚 ・成績不振生徒への指導 	B	<p>学習向上は見込めない結果になっている。すべては英語力です。 生徒の受験準備が遅いです。指導はしているが、なかなか上手く浸透していません。</p>

分掌目標	生徒が本当に希望する高校卒業後の進路の実現 関西大学合格者 100 名		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
1 学年目標 ・ 習得型学習行動の定着 ・ 課題克服型学習行動の定着	B	習得型学習行動の定着については、例えば模擬試験受験前後の課題についてはかなり定着した。課題克服型についてはまだまだ浸透はしていない	
2 年間行事の実践 ・ HR 等を活用しての、学習方法の具体的な指導 ・ スタディーサポートや進研模試の徹底活用	B	学習方法の具体的な指導については、そもそも木曜日の予定がタイトなため、時間が取れない状況であった。スタディーサポートの活用については概ね達成できた	
3 学年運営及び学年会の活性化 ・ 定期的な担任会の開催 ・ classi を活用しての担任間の連携 ・ 学年通信の発行	A	classi については導入しているコースと導入していないコースがあるため、連携は難しかった。学年通信については昨年度から全ての予定をこなした。	
4 補習・講習の充実 ・ 関西大学合格者 100 名に向けた講習の開催 ・ 期末考査後の補講習の充実	A	各コース計画を立て、実施。生徒の参加状況も概ね良好であった。	
5 生活指導について ・ 集会時の人の話を聞く態度の指導 ・ 授業時と授業以外のメリハリをつける態度の育成。特にチャイムと同時に授業開始となることを目指す。	A	昨年度に比べて、集会時での話を聞く態度は改善された。ただ、チャイムと同時に授業開始することに関しては、教員側の問題が存在する。学校全体で取り組みたい課題である。	
6 進路指導 ・ 進研デジタルサービスの徹底活用 ・ スタディーサポートの徹底活用	A	学年全体として活用できた。	
7 学習指導 ・ 復習を定着させる工夫の実践 ・ 見直しノートの活用 ・ 模試の結果分析と活用	B	学年全体での取り組みとなったかという点では徹底できなかった。模試の分析と活用については各教科での活用に委ねた。	

分掌目標	将来に向かって「学習指導」・「進路指導」・「生活指導」の確立		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
1 学年目標 ・校訓の具体化 ・学順の実践 「教室の掃除の実践」 ・「時間を大切にする」	B		
2 年間行事の実践 ・コース別行事の実践 ・生徒、保護者向け説明会の実施 ・学級懇談会の実施	A	大学見学・学校行事等は予定通り実施できた 次年度も継続して実施。	
3 学年運営及び学年会の活性化 ・担任間の連携 ・各コースの主任との連携 ・各分掌との連携	A	文理選択・コース変更に対して担任間の連携 は取れた。	
4 補習・講習の充実 ・放課後講習の実施 ・期末考査後の補講習の実施	C	教員の関係上プレップは十分に実施できな かった。PW・特進・英数は例年どうおり報 角講習・期末後の講習は実施できた。	
5 生活指導について ・生活習慣の確立 ・配慮を要する生徒への積極的な関わり ・共通認識を持って指導に当たる ・情報メディアのモラルの教育推進	C	情報メディアの事象がありました。SNS の教 育推進が課題。	
6 進路指導 ・進路指導部との連携 ・2年次コース選択についての指導 文理選択 コース変更 ・LHR の活用	B	大学見学会・各コース会議に参加し充実でき た。今後も参加する。 LHR の活用が課題である。	
7 学習指導 ・学習習慣の確立 ・学力向上対策 ・模試の結果分析と活用	C	学年末考査後の講習が実施できなかった。	

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ さまざまな活動を通して、人間的な成長を図る。 ・ 高校につながる学習習慣の確立。 		
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
中学生として、充実した学校生活の実践		B	様々な活動を通して、多くの生徒が充実した学校生活を送ることができた。中には授業と休み時間の切り替えがうまくできていない生徒もいた。
自学自習力の定着・学習習慣の確立		B	帰宅後の学習習慣がまだ確立していない生徒に対しては、自分の将来像や、今何が実行できるかを考える機会を持つよう工夫をした。
勉強合宿の企画と実行		A	2月の勉強合宿では、高校生になる自覚を持つことに主眼を置き、しっかりと学習に取り組むよう指導を徹底した。また、入試問題の対策を行い、本番入試に繋げることができた。
修学旅行の事前学習・実践		A	6月から海外修学旅行の事前学習を実施した。インターネット等で調べた内容を基に、活動の予定を考えさせることができた。「ECC」外語専門学校の研修を活用できた点もよかったと思う。
校外学習等の学校行事の作成と実行		A	社会（公民）科の学習の一環としてとして、「大阪地方裁判所」と「地方検察庁」を訪問し、司法が身近なものとしてとらえさせることができた。
学年からの宿題、小テスト、補講習等の企画・運営		B	中3においても、学年課題と小テスト、補習（再テスト）を実施し、基礎学力の定着に向けて取り組んだ。この取り組みを通して、さらに次のステップへと進むよう、工夫していきたい。
学力推移調査結果の把握と学年としての取り組み案作成と実行		B	調査結果を受けて、各教科で苦手分野の克服につながるよう、積極的に取り組んだ。事前学習としては、まだ不十分なところもあるので、今後もさらに継続していきたい。
学年会および授業担当者同士の情報交換の活性化		B	人数が6名なので、必要に応じて個々の情報交換の機会を持つことができた。可能なら月に1～2度、定期的に情報交換の場が持てたなら、さらに活性化につながる。
保護者説明会の企画と実施		A	必要に応じて、保護者説明会を企画し、実施することができた。

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> • 基本的生活習慣の確立、および基礎学力の定着。 • さまざまな学校行事を通して、自主性を養う。 	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
1. 6カ年教育プランに基づく中2学年目標の設定と実践	B	上記の目標を設定し、その実践に努めたが、学習習慣の定着の点ではこれから一層の取り組みが必要である。
2. 基礎学力の定着に向けた、早朝テスト・補講習等の企画と運営	A	国語・数学・英語の早朝テストを曜日毎に振り分けて実施すると共に、補講習を実施していただいた。
3. 家庭学習習慣、および自学自習力の定着	B	長期休暇中の宿題や課題については、未定出をなくすため、放課後の居残り学習で提出させた。日々の宿題についても、できる限り、放課後の居残り学習を実施した。
4. 学年関連行事の調整、行事企画と実施	A	宿泊行事である勉強合宿・日置川民泊・スキー実習の企画と実施、また、校外学習の企画と実施を、学年団の先生方の協力のもとに実施することができた。
5. 学力推移調査の結果分析と、学習指導面へのフィードバック	B	学力推移調査対策としての過去問対策を行うと共に、本試験の結果分析会で生徒の現状把握を行った。一方、指導面へのフィードバックは教科まかせになった。
6. 学年の3クラス間における横の連携と、学年団全教員間での情報共有による学年運営	A	組担任・授業担当者から出てきた個々の生徒の現状を把握し、早期対応に活かすと共に、学年団での共有に努めた。
7. 学年と分掌（生活指導部，進路指導部，入試対策部，各教科）との連携，および情報の共有	B	各分掌の学年係りの先生を中心に、各部署と学年間の情報共有に努めた。学年に係りの先生がおられない部署については、連携が取りにくかった。
8. 保護者説明会，三者懇談，日々の家庭連絡等を通じた学校と保護者との密な連携	A	担任・副担任を中心に、電話や面談を通して保護者と密に連絡を取り合い、生徒指導に活かした。

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校生活の充実に向けた，基本的生活習慣および学習習慣の定着 ・ 保護者との連携による，生徒の自学自習力の育成 	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
１．充実した学校生活の実践に向けた生徒指導の確立	B	生活全般の指導を行ってきたうえで、結果が出ている面と、総合的に判断して、まだまだ結果が伴っていない面があった。
２．上宮中学校と上宮太子中学校を合わせた 上宮学園中学校としての新たな取り組みの確立	B	上宮学園中学校として新たな取り組みができた部分は少なかったように思う。
３．基礎学力の育成と定着に向けた，学習指導面への取り組み	A	日々の指導の中で学習指導に関しては力を入れた。結果、成長させた面が多々あった。
４．学力推移調査の結果分析と，学習指導面へのフィードバック	A	結果をしっかりと確認し、生徒の指導に役立たせることができた。
５．校外学習，勉強合宿，スキー実習等の行事企画と適切な運営	A	前年までの学年の蓄積のおかげで、充実した行事企画と運営が行えた。
６．学年の３クラス間における横の連携，および情報の共有による学年運営	B	日々、情報の共有は行ってきたが、クラス間を越えてのまとまり、ルール作りなどまだまだ改善できるところは多い。
７．学年と各部署(生活指導、進路指導、入試対策、各教科)との連携，および情報の共有	A	各部署との連携はしっかり行えた。それによって生徒への指導もよいものとなった。
８．保護者説明会，三者懇談，授業参観，学級懇親会等を通じた，学校と保護者との密な連携	A	特に学年の担任先生たちは保護者と綿密に連絡を取り合ったので、よい学年運営ができた。

③コース

分掌名（ 6 ヲ年・特進 ）

評価責任者名 （ 池田 竜司 ）

分掌目標	中高6年間を通じて生徒が将来の自己像を描きつつ、自律的学習者となれるよう指導を行う。各学年の学力向上策の促進、提案を行う。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
<p>コース再編</p> <p>平成31年度の特進コースとパワーコースの合体に向けて、行事等の見直しを行う。</p>	A	<p>京都大学見学、夢ナビライブ等パワーコースと合同で行事を組むことができ、次年度以降も継続して合同で行う予定である。</p>
<p>六ヵ年での補講習プランの検討</p> <p>中1から高3まで6ヵ年での補講習プランをシステム化。特に高校の通年補講習において他コースとの連携・協力を図る。</p>	A	<p>六ヶ年コースだけでなくすべてのコースと一緒に補講習会議を行い、次年度以降綿密な補講習の予定が出来た。</p>
<p>行事・企画</p> <p>学校の行事と6ヵ年一貫コースの行事の精査・改善を行う。</p>	B	<p>ECC国際外語学院でのグローバル体験プログラムに参加するなど行事を追加することはできたが、まだまだ改善の余地はある。</p>
<p>キャリア教育</p> <p>中学では体験的なキャリア教育の企画を行う。高校でも体験的なキャリア教育と社会人の講演等の企画を行う。</p>	B	<p>ECC国際外語学院でのグローバル体験プログラムで体験的なキャリア教育は出来たが、一年を通してのキャリア教育は出来なかった。</p>
<p>大学入試改革・「新テスト」の情報収集と対策</p> <p>大学入試改革・「新テスト」に対応する為の情報収集と対策を協議する。</p>	C	<p>大学入試共通テストの情報収集は出来たが、対策については出来ず、次年度以降の課題となった。</p>
<p>各学年の学力向上策の促進、提案</p> <p>各学年・各コースにおける学力向上対策の協議を行う。</p>	B	<p>六ヶ年会議等を行い、学力向上に向けての対策を」行った。また、生徒にClassiの利用も促した。</p>
<p>生徒満足度の向上</p> <p>生徒満足度が学校全体に比べてやや低い原因を分析、向上策の協議を行う。</p>	C	<p>生徒満足度が学校全体に比べてやや低い原因を分析することは出来なかったが。</p>

分掌目標	○生徒の現状に即した連携・指定校推薦のシステムの企画運営。 ○学力を中心とした生徒の総合力を伸ばすための具体的施策を行う。 ○推薦入試にとらわれない新しいプレップコースのあり方を考える。		
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
連携・指定校推薦入試枠にとらわれない新しいプレップコースのあり方について研究する		B	学年での目標に合わせた方向性を模索できた
生徒の現状に即したパスポート項目および基準の検討		B	出席日数やクラブ活動での見直し、○の基準の見直しを検討している
生徒の現状に即した連携・指定校制推薦入試の最終選考方法の検討を継続する		C	検討はしていない
プレップ科の授業内容の工夫。とりわけ高3の2学期と高2の3学期のカリキュラムに新しい工夫を導入する		C	新しい工夫を検討中
大学見学会の企画・運営		A	例年通り、充実した内容で実施できた
連携大学との良好な関係維持のための新たな工夫。未来型の連携の形を研究する		B	新しい提言が大学側からもなされている
生徒に対するプレップの内容の周知・徹底 3年間のビジョンを明確にさせる		A	1年での説明会のほか、プレップ会議や生徒個々の疑問に答えることができています
教員に対するプレップの内容の周知・徹底		A	各学年プレップ会議において、機会があるごとに確認している
プレップコース生徒の具体的学力増進策を講じ、成果につなげる		B	模試においてデジタルサービスの活用を提言している
家庭学習・自主学習できる生徒にするための具体的方策を講じる		C	方策は講じられていない
学校全体に対して、プレップコースを理解してもらうための適切な情報発信を定期的に行う		C	情報発信はできていない

分掌名(英 数) 評価責任者名(杉 本 智 也)

分掌目標	各学年の生徒に応じた学習指導を実施する。 国公立大学への合格者をふやす。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
学力向上に向けての指導の徹底	A	国公立大学の現役合格者は 10 人であった。 英数コースとして最後まで国公立大学を目指すように引っ張るべきか、悩むところである。	
講習の充実	A	放課後および長期休暇前に各学年で講習を立案し、効果的に実施できた。	
模擬試験の分析 生徒個々にまちがった箇所を確認させる	C	もっと模試等を活用すべきか。	
大学見学会の実施	A	例年通り、1 年生で大阪市立大学の見学を午前・午後に分かれて実施した。印象は良かったようである。	
二年次からのコース選択（1 年）	A	各生徒のコース選択を生徒・保護者とともに考えた。	
個人面談の充実	A	二者面談や保護者との懇談を行い、生徒個人の把握に努めた。	
情報の共有化	B	英数コース独自の会議は行わなかったが、国公立コース会議を通じて情報の共有はできたのではないか。	

分掌目標	東京大学・京都大学・大阪大学・神戸大学などの難関国立大学への進学																																																															
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題																																																														
コース主任と管理職による会議を重ね、各コースにおける諸問題を解決して、教育環境のソフト面を改善する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(6))	A	国公立会議を毎週土曜日に開催することができた。教育環境のソフト面を ICT とアクティブラーニングと捉えると本年度は高1・2で教室にモニターが設置され、クラッシーを活用し、高3クラスでは、希望者ではあるが、スタディアアプリを活用することができた。 来年度は新校舎でプロジェクターを活用する予定である。 また、全学年でクラッシーを活用した指導を行う予定である。																																																														
教科・各コースが考案する補講習のプランと、実際に教科がおこなう補講習がマッチングし、より合理的に進行する形を求める。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(7))	A	高3では従来型の全員参加の講習を、高1・2では、希望制講習を充実させた。 以前のように、5教科の担当者がコース会議に出席するわけでないので、教科とコースのコミュニケーションのとり方を考えなければならない。																																																														
進路指導 LHR のあり方を見直し、各学年・各コースの教育プランやシラバスに反映させる。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(9))	B	高1では勉強法指導会で独自性を出している。 以高2・3での進路指導 LHR のあり方を見直す検討をすべき。																																																														
パワーコース専願者の志望者を増加させる方法を検討する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(12) V④)	B	専願 受験 合格 H31 43 13 1クラス H30 24 9 1クラス H29 43 10 1クラス H28 40 16 1クラス H27 49 11 1クラス H26 30 16 2クラス 昨年度に比べて受験者+19 合格者+4 という結果になった																																																														
進研模試の平均偏差値が、1学期から3学期にかけて1～2ポイントアップするような方策の立案に着手する。 (5 中期的目標 c 生徒の学力・進学面の目標 (2))	C	1学期 → 3学期 高1 53.9(進研7月) → 56.6(進研1月) 高2 55.4(進研7月) → 53.1(進研2月マーク) 高3 54.9(進研6月マーク) → 53.9(進研9月マーク) 偏差値の維持で精一杯である。 進研模試の平均偏差値が、1学期から3学期にかけて1～2ポイントアップすることで最終目標を達成に近づくとは考えられない。学校目標を再考すべきである。																																																														
3年後には国公立型コースから、東京・京都・大阪・神戸大学に合計5名以上、大阪府立大学に合計10名以上、また、国公立大学合格者合計50名以上の合格者を継続に維持できるような指導体制を作る。 (5 中期的目標 c 生徒の学力・進学面の目標 (3))	C	<table><tr><td></td><td>31</td><td>30</td><td>29</td><td>28</td></tr><tr><td></td><td>現</td><td>浪</td><td>現</td><td>浪</td><td>現</td><td>浪</td></tr><tr><td>東京</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr><tr><td>京都</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr><tr><td>大阪</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr><tr><td>神戸</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td></tr><tr><td>市立</td><td>0</td><td>0</td><td>2</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td></tr><tr><td>府立</td><td>4</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>2</td></tr><tr><td>国公立</td><td>21</td><td>0</td><td>11</td><td>2</td><td>4</td><td>6</td></tr></table> 管理職が主導して指導体制を作っていたきたい。もしくは学校目標を再考するべきである。			31	30	29	28		現	浪	現	浪	現	浪	東京	0	0	0	0	0	0	京都	0	0	0	0	0	0	大阪	0	0	1	0	0	0	神戸	1	0	0	0	0	1	市立	0	0	2	0	1	0	府立	4	0	0	0	0	2	国公立	21	0	11	2	4	6
	31	30	29	28																																																												
	現	浪	現	浪	現	浪																																																										
東京	0	0	0	0	0	0																																																										
京都	0	0	0	0	0	0																																																										
大阪	0	0	1	0	0	0																																																										
神戸	1	0	0	0	0	1																																																										
市立	0	0	2	0	1	0																																																										
府立	4	0	0	0	0	2																																																										
国公立	21	0	11	2	4	6																																																										

<p>補講習プランに基づき、当該教科は補講習を 通年で実施する。 (5 中期的目標 c 生徒の学力・進学面の目標 (6))</p>	<p>A</p>	<p>高3では従来型の全員参加の講習を、高1・ 2では、希望制講習を充実させた。</p>
<p>新カリキュラムの作成に取り掛かる。また、現 状の教育プランおよびシラバスに改善を加え る。その中心は新しい高大接続改革に対する ことを目的とする。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(4)) 中高新学習指導要領に基づくカリキュラムの 見直しを行い、教育プランとシラバスにも反 映する。 (6 今年度の目標 b 学校の教育環境と組織運営(4))</p>	<p>D</p>	<p>今年度はカリキュラム案を出せず。 来年度早々にも案を提示したい。</p>
<p>コース会議を定期的に開く Ⅰ 高1から高2への生徒のコース変更のル ール整備と生徒に関する情報共有を進める。 Ⅱ 高2から高3への生徒に関する情報共有 を進める。 Ⅲ 各コースの取り組みの中で一緒に行える 事柄について協力しあって学習効果を上げ る。 Ⅳ 平成31年度の特進コースとパワーコー スの合体に向けての取り組みを行う。 (6 今年度の目標 b 学校の教育環境と組織運営(6))</p>	<p>B</p>	<p>国公立会議を毎週土曜日に開催することが できた。 Ⅰ ルール整備はできているが、生徒に関す る情報は、国公立会議に上がってこないの で不十分である。 Ⅱ 担任教科担当がパワーと特進を掛け持 ちすることで生徒に関する情報共有が進ん だ。 Ⅲ 概ね達成している Ⅳ 担任教科担当がパワーと特進を掛け持 ちすることで、教材と進度を合わすことが できた。 来年度の課題は ・コース変更をする生徒の情報共有 ・高2における教科の進度・教材・行事を合 わすこと</p>
<p>模擬試験・スタディサポートについては、職員 会議、コース会議、教科会議での実効性のある 分析を促進し、教科指導、進路指導に十分反映 できるようにする。 (6 今年度の目標 c 学力・進学面の目標(1))</p>	<p>D</p>	<p>進路からデータががでず、有効な分析ができ なかった。 進路指導部の持っているデータを、逐次コー スに提供していただきたい。</p>
<p>進路指導部と各コースが緊密に連携して情報 共有をスムーズに行い、一本化できる教育活 動を協力して行う (6 今年度の目標 b 学校の教育環境と組織運営(17))</p>	<p>D</p>	<p>今年度、大学合格者のデータや模擬試験のデ ータの提供は一切なかった。緊密に連携して いるとは言い難い。 進路指導部の持っているデータを、逐次コー スに提供していただきたい。</p>

④進路指導

分掌名（ 進路指導部 ）

評価責任者名（ 畑中 広 ）

分掌目標	大学入試改革に対応した進路指導を構築し、一人ひとりの進路実現をサポートする。また進路指導行事を通して生徒の進路選択と学力向上に寄与する。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
高１生徒の 2020 年度大学入試に向けて、各方面からの情報収集に努め、対策を講じる。特に「英語外部検定試験」「e－portfolio」「新しい調査書」について注視する。	A	各種分析会で情報収集できた。英語科と連携して高１国公立クラスで「GTEC」の検定実施ができた。来年度の「GTEC」についても英語科主導で具体的計画が進む。来年度から高校１・２年への Classi 全面導入が決まり e-learning 係主導でポートフォリオへの蓄積が始まる。調査書について今年度は特に変更なし。	
プレップ・一貫プレップコースにおいて、プレップ項目の見直しをすすめる。また指定校制推薦入試のみに頼らない進学指導を進める。私立大学の入学定員厳格化を踏まえた進路指導について企画・提言を行う。	C	プレップ主任主導でパスポート項目の見直しを進めた。各学年担任をはじめ、教員全体にもアンケート調査を行った結果、大筋で現行制度を維持、ただし一部項目についてはマイナーチェンジを行うことに決まった。私立大学入試の難化を受けて指定校制推薦合格者が共学化以来最高となった。	
各コースと連携して「進学実績」向上のための具体的施策を行う。とりわけ、国公立大学・関関同立の合格者を増やす施策を考え実行する。	C	国公立大学の公募制推薦入試のエントリー規定が完成した。国公立大学の推薦入試受験者も合格者も増えた。昨年来の私立大学入学定員管理の厳格化により、難化した私大入試の影響が国公立志望者にも広がり、入試全般が難化した。担任へのまめな情報提供は進めたものの、全体として有効な手立ては打てていない。	
看護・医療系進学希望者に対する情報提供を促進する。	B	希望生徒の登録制を導入。メール配信等で情報提供を行った。	
効果的な「分析会」の定期的開催と企画会・教科会・学年会で検討材料となる資料提供を推進する。主な分析対象は「スタディーサポート」および「模擬試験」。それを受けた学力増進策なども提案してゆく。	C	スタディーサポート分析会は２年目で定例化した。しかし、模試の全体分析会は実施できなかった。引き続き実施に向けて努力する。	
「高校進学準備講座」「大学合格（基礎・準備）講座」の安定的運営を図るとともに、英語４技能化に対応した「英検対策講座」「オンライン英会話」の充実を図る。	A	講座の総称を「Uゼミ」と決めた。英検対策講座を「英検合格講座」と改称し、新たに中学１年生を対象に「４級」講座を独立開講した。準１級合格者１名を出した。オンライン英会話は順調に受講者を増やし、延べ 70 名が利用した。	
生徒や保護者対象「進路説明会」を洗練させ、生徒のやる気に更に働きかける。チーム制を導入するなど、複数の視点でコンテンツを充実させる。IT 機器を導入し、わかりやすく質の高い進路説明会を創造する。	B	引き続き「わかりやすくなる」説明会を心掛けた。生徒に提供する資料の内容増やすなど工夫した。チーム制は導入できず、来年度に引き継ぎたい。	
ベネッセ・河合塾等の主催する入試等分析会へ積極的に参加し、必要な情報・資料を収	B	各種分析会・セミナーへは相当回数参加して、過渡期の入試制度に関する情報を収集した。教員や生徒・保護者にタイムリーに必要な	

集し、教職員・生徒・保護者に提供する。また、教職員に対して分析会等への参加を促す。		な情報を提供しよう心掛けた。
---	--	----------------

分掌目標	生徒が自分の将来に夢や希望を抱き、自分の意思で主体的に進路を選択する能力を育成する。また希望の進路に進めるよう、模擬試験の結果活用や補講習・講座などの充実を図り、学力向上をサポートする。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
中学学力推移調査 ・ 年 2 回実施の準備・実施 ・ データの活用 ・ 分析会の設定	B	問題なく実施できた	
進路 L H R の内容の見直し ・ 各学年・学期の実施の内容の検討	B	十分な検討はできなかった	
高 1 校内模試 ・ 校内模試（年 3 回）の準備・実施 ・ データの活用 ・ 分析会の設定	B	実施はできたが、実施時期・内容についてはさらに検討が必要	
高 2 校内模試 ・ 校内模試（年 3 回）の準備・実施 ・ データの活用 ・ 分析会の設定	B		
高 3 校内模試 ・ 校内模試（年 5 回）の準備・実施 ・ データの活用 ・ 分析会の設定	B		
スタディーサポート・ ・ 高 1 高 2、年 2 回の実施 ・ 事前学習教材の準備と活用の案内 ・ データの活用 ・ 分析会・結果活用勉強会の設定	B		
R－CAP ・ 高 1、年 1 回の実施 ・ データの活用	B	問題なく実施できた	
外部模試 ・ 案内と取りまとめ ・ データの活用	B	問題なく実施できた	
進研模試デジタルサービス ・ 生徒・教員の活用促進	C	十分に活用できていない	

⑤教務

分掌名（ 高校 教務部 ）

評価責任者名（ 西岡 信敬 ）

分掌目標	学校業務の円滑な運営に寄与しつつ、行事内容の改善、業務内容の改善を計る。		
重点課題		評価	成果と課題
Ⅰ 部長			
①教務に関する事項についての 連絡調整及び指導助言	B	1年間、教務部長を経験する事で一昨年よりもスムーズに連絡調整ができたと思う。指導助言に対しても、行事予定から逆算して、「いつ・何をしてもらいたい」を明確にできたと思われる。	
②教務部会の召集	A	ほぼ毎回開催し、係の先生と共通認識を持てた。	
③校務に関する改善案の提言	A	今後の改善につながる立案ができた	
④入学試験の準備・運営	A	大きな問題もなく対応できた。	
⑤教育計画の実施に際しての調整、 指導助言	B	調整できた部分はあるが助言には至らなかったところがある。来年度の課題である。	
Ⅱ 行事企画運営係			
①行事について情報収集・検討・ 集約	B	できる限り情報収集等は行っているが、まだまだ検討の余地があると思われる。	
②各行事の企画・運営	B	当初の予定通りできた。	
③各行事についての保護者連絡	A	滞りなく行った。	
Ⅲ 修学旅行係			
④各種情報収集・検討	C	スクーリーズに関して、想定以上の催し物で戸惑っている。	
⑤高2学年団への情報伝達・指示	A	滞りなくできた。	

⑥高2保護者への内容説明	A	滞りなくできた。
⑦現地での交渉・各種準備	B	現地での突発的な事象に対する対応を、もう少し考えなければいけない。
⑧次年度に向けての検討	B	今回の反省点を踏まえて、業者と検討している。

IV時間割係		
①新年度時間割作成 授業内容・選択科目・教員の都合等の制限項目が時間割作成に困難さをもたらしている。制限項目の減少に向けて提言を行う。	C	次年度に向けて、総務を通じて非常勤の先生方の時間割に余裕ができるようお願いした。
②通常時間割変更 『補欠は罪、振替えは義務』をスローガンに自習授業の撲滅に向けて提言を行う。	B	授業を振替えて出張する習慣は定着してきている。今年度も時間割変更が厳しく、自習にするしかない授業時間が増えてしまった。
③定期考査時間割作成 教科間に不公平感が出ないように努める。	C	先生方の出勤日の関係で、中間と期末で日程を変更し難い科目が出てしまったために、一部で不公平感が生じてしまった。
④考査監督作成 教員間に不公平感が出ないように努める。監督の交代は教員間の個人的やりとりで解決する仕組みが浸透してきたため、円滑に遂行できている。	B	専任・常勤の先生方の担当時間数をできるだけそろえた。次年度に向けては、授業担当クラス以外にも監督に行っていただくことを検討したい。Penta200を利用して、各先生方のPCから監督表や考査時間割を確認、印刷できるように変更したことも定着してきている。
⑤考査問題管理・授受 考査問題提出期限を設け、考査前日に問	B	印刷機に問題があり、白紙混入などのミスが多発した。監督クラスの間違いなどのミスは出ているので注意喚起したい。

<p>題提出を確認するため、トラブルは減っている。</p> <p>先生方の個人的ミスに対しては、その場での指導と啓発活動に励む。</p>		
<p>⑥行事に伴う時間割変更</p> <p>消滅する授業が復活する場合にミスが発生しやすい。復活した授業担当者が不満を言うことに対しては、強く指導する。</p>	B	概ね問題なく実施できた。行事に伴う授業の復活については先生方の理解も進んだ上に、事前に発表することで問題は減少した。
<p>⑦時数計算表の作成</p>	B	特に大きな問題はなかった。
<p>⑧職員会議・行事時の教員の出欠確認</p> <p>会議等の理由無き欠席者に対して何らかの措置をとらないのなら、出欠確認は不必要と思われる。</p>	B	前年度同様に職員会議の出欠確認は取っていない。 学校行事や入試などの出欠は厳密に行い、問題はなかった。
<p>⑨欠勤・遅刻等の届けの確認</p> <p>欠勤・出張等について、常習的に届け出ノートに記載しない、電話連絡が遅い等の教員に対しては強く指導する。</p>	B	教務で把握しているものと事務で把握しているものとの間に、一部違いが生じていた。 遅刻連絡が遅く、授業変更が間に合わない例が見られた。

V 書類帳簿・教科書係		
<p>①教務日誌</p> <p>教務日誌は漏れのないよう万全を期す。</p>	A	Web 上で処理することができるようになり、業務の簡素化が順調に進んだと思われる。
<p>②掲示物 各種掲示物の整理整頓を期す。</p>	A	問題ありません。
<p>③調査書・成績証明書等の発行</p>	B	急な調査書の発行(休暇中など)について、窓口を事務所においていただきたいと思う。

④各種書類の作成・発注・管理	A	問題ありません。
⑤指導要録作成補助	A	問題ありません。
⑥教科書・副教材の採択指示・点検 教科主任と担当者での二重のチェック体制を取り、万全を期す。	A	問題ありません。
⑥教科書・副教材の採択報告・発注・管理	B	教科主任と各教科担当との間で、しっかり話が詰められておらず、発注に時間がかかった。
⑦入試資料の作成	A	教務部長に一任しております。
VI庶務・内規係		
①教室配当の決定	A	教務部長・学年主任と相談し、決定した。
②教員配置の決定	A	教務部長・学年主任と相談し、決定した。
③パーソナルロッカー搬入・設置・廃棄手配 生徒のパーソナルロッカーについて、事務局に指示する。	A	滞りなく対処できた
④破損届受付及びその修理依頼	B	破損届を提出するのが山本裕先生のみである
⑤消耗品の補充	A	金安先生が十分に補充した。
⑥教職員に対して、内規の周知・徹底	A	新任研修会で説明した。
⑦特別指導実施報告書の周知	A	滞りなく対処できた
⑧内規の生徒への周知・徹底	A	新入生オリエンテーションで説明した。

Ⅶカリキュラム		
①保護者対象説明会にて解説	A	高1保護者説明会で説明した。
②新任教員へ説明	A	新任研修会で説明した。
③今後のカリキュラムの検討	A	2022 年に向けて検討を開始した。
④教科単位数の点検	A	点検した。
Ⅷ学校評価		
①業者(東京)との連携	B	忙しい時期に、メールの確認不足があった。
②生徒・保護者・教員アンケートの 実施	A	実施した。
③授業評価について	B	煩雑で大変な作業であった。
Ⅸ保護者会係		
①保護者会に関する事務	A	滞りなく対応できた
②各組学級委員の募集補助・各種連絡	A	滞りなく対応できた
Ⅹその他		
①インターンシップ学生受入れ手続き・ 運営	A	インターンシップ学生の応募が無かった
②各種印刷物の作成・配布	A	滞りなく対応できた
③芸術鑑賞会の立案・外部との交 渉	A	生徒・保護者にも好評であったと思う

分掌目標	上宮学園中学への校名変更にもない、新しい全人教育における生徒の人間力の向上に繋がる行事等を企画し、実践してゆく。		
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
日々の行事の運営 行事の計画と実行・改善 （各式典、体育大会、文化祭、合宿など） 中学から高校へスムーズに進学できるための方策の検討		B	行事のスケジュールが過密で、行に追われることが多かった。特に2学期
教務係との業務の連携、運営 行事企画運営（日々の行事の確認、各行事の企画・整理、） 時間割（日々の時間割の変更・補欠の確認、考査に関する事項の確認、考査監督表の作成、問題の管理と答案の授受） カリキュラム（現行のカリキュラムの改善点、次年度以降の考察、総合学習の検討） 書類帳簿（教育委員会提出書類作成、教科書類のとりまとめと発注、転学生徒用書類の作成、教務日誌の作成、指導要録の作成指導、書類帳簿備品の整備、評価・評定の記入依頼） 庶務（物品物・消耗品関係の点検、各教室備品関係の点検、各教室の配置、職員室の配置の検討）		B	各学年と協力し、日々の行事をスムーズに運営できた。 時間割業務がスムーズに行えた。 カリキュラム等の検討ができなかった。 各主任が責任をもって業務を行いスムーズに作成または点検ができた。
教員間の情報の共有・連携 （生徒の事故、トラブルの把握、対処、防止）（成績面での現状の認識、問題点の共通認識、改善策の考察）		B	学年主任を中心として情報を共有しながら生徒指導に取り組めた。
中高教務の連携（日々の業務の情報の共有化、問題点の共通認識、解決策の模索） 特に今年度から中学が7号館に移転したため、よりきめ細かい連携が必要となる		C	情報は共有できたが、連携した行動ができるまでは至らなかった。
会議や連絡会について （伝達内容の確認、懸案事項の点検、考察）		B	定期的な会議を開催することができた。
教務会の円滑な進行について （教務としての意見の取りまとめ、検討事項の考察→決定事項の報告）		A	定期的に教務会を実施し、行事企画等を行えた。ただ、個々の教員の負担が大きい。
上宮学園中学校について 来年度より太子中学校との統合に伴い新しい学校として生まれ変わることを強く認識し、新しい学校として、コ			試行錯誤があるが、学園中学校としての目標が定着しつつある。

<p>ー</p> <p>スの目標の明確化、中学校での新たな取り組みの具体化 （魅力ある生徒の育成）（進路学習の充実）（ネイティブ と の連携と英語教育の充実）（英検の学年による目標の達成） （読書指導の充実）（早朝、放課後テスト、補講習の充実） （数学力をアップするための方策の検討）</p>	B	
<p>六ヵ年を見据えた教育の充実</p>	C	<p>中学と高校の連携が希薄であるように思う。</p>
<p>上宮学園中学校における校外学習および総合学習の充実 と積極的な取り組み （進路学習、社会・音楽・美術関係を含む）</p>	B	<p>職業体験等の実施が望ましいように思う。</p>
<p>上宮学園中学校における中学入試の実施と入試実施に関する諸問題の検討 （公開授業見学会・プレテストを含む）</p>	A	<p>中学・入試対策部・データ処理室の 教員が連携し、スムーズに実施 できた。</p>
<p>保護者会との協力</p>	B	<p>保護者役員との連携を持てた。</p>
<p>部活動面の充実に繋がる取り組み（クラブの再編や中1 の入部時期など）</p>	B	<p>女子生徒が入部できるクラブを充実させる必要があるように思う。</p>

⑥生活指導

分掌名（ 生活指導部 ）

評価責任者名（ 福 井 篤 ）

分掌目標	生徒のためになる指導		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
<ul style="list-style-type: none"> 生活指導マニュアルの実践 本校全職員による統一された指導の実践 	C	マニュアルに統一して指導をしているが、マニュアルがあるのをあまり知らない方もおられて、全教員統一された指導はなかなか難しい。	
<ul style="list-style-type: none"> 重点指導課題 頭髪（奇抜な形）・服装（シャツ・化粧） 遅刻（5分前行動）・携帯（校内使用） 考査規定の遵守（不正行為） 	C	頭髪、服装、遅刻、携帯、不正行為等全てにおいて、前年並みである。	
<ul style="list-style-type: none"> 生活指導部の役割の明確化 担任および学年中心の指導体制構築 生活指導部は指導の助言とサポート 	C	中学は、事故が発生した際には担任、学年主任をはじめ、学年団で対応できているが、高校では生活指導部が中心となり指導している状況で変わらない。	
<ul style="list-style-type: none"> SNSをはじめとするトラブルへの対応 SNSに関するトラブルや問題行動への啓発活動や指導 	C	Twitter や LINE に絡むトラブルや、生活指導事故は変わらない。 これからも、できるだけ啓発活動を中心に指導を続けていく必要がある。	

⑦入試対策

分掌名（入試対策部）

評価責任者名（北村 吉隆）

分掌目標	上宮学園中学校、上宮高等学校とも安定した生徒募集をする。		
重点課題	評価	成果と課題	
① 学校説明会等の円滑な運営と見直し	B	<p>○中学校入試においては、学校説明会は例年同様 3 回実施。本年度から体験学習会に代わり、実際の授業を見学する公開授業見学会を 3 回実施した。昨年度までは、1 回だけであったプレテストも 2 回実施した。その結果、昨年、説明会等参加者数は、836 組であったが、1064 組（説明会 258 組、公開授業見学会 239 組、一般学力型プレテスト 375 組、適性検査型プレテスト 192 組）に増えた。</p> <p>○高校入試においては、例年同様 4 回の学校説明会を実施。取り組みとしては、開始時間を午後 3 時から午後 2 時に変更した。学校説明会の参加者数は、2311 組から 2574 組に増加した。</p>	
② 入試説明会の日程、内容の吟味とプレゼンテーションのあり方についての研究	B	<p>日程に関しては、他校とのバッティングを避けるように設定した。プレゼンテーションのあり方に関しては、外部説明会においても、出来るだけコンピューターを利用し、パワーポイントでの説明を心がけた。その中でも動画の利用を増やし、メッセージ力を強くした。今後、入試説明会において本校生徒の活用の検討も必要かと思われる。</p>	
③ 塾対象説明会についての検討	B	<p>昨年同様、実際に塾の先生方が進路指導を始める 9 月に時期を変更した。また、内容も各教科の傾向と対策に関する内容の説明は取りやめた。今後、学校での実施も視野に入れて検討していきたい。</p>	
④ 塾・中学校訪問を中心としたより効果的なアプローチの研究	B	<p>中学校訪問に関しては、春と、進路指導の始まる秋に実施した。塾訪問は、随時実施、説明会等の案内、また、説明会参加者が受験につながるように、広報した。</p>	
⑤ 中学入試の日程等に関する提案（教科型・適性型・自己推薦型）	B	<p>前年の反省を踏まえ、一般学力型、適性検査型、自己アピール型と初日の午前に 1 次入試として実施。2 日目午前に一般学力型を 2 次入試として実施した。</p>	

⑥ 高校入試（インフル対応）に関する日程、方法の提案	B	今年度も、国語、数学、英語の3教科で実施。高校教務部で5教科での実施が可能かどうか検討してもらったが、3教科での実施となった。
⑦ 中学校、高等学校ともに幅広く受験してもらうための方策を考える	B	色々な、場面・場所での広報活動を実施した。今後さらに広げたい。
⑧ 部署内の情報の共有化を図る	A	昨年度同様ホワイトボードに、新しい情報を掲示し、出来るだけタイムリーに共有できるようにした。
⑨ 上宮太子入試対策部との必要な情報の共有化を図る	B	1回ではあるが情報交換会を実施。また、塾対象説明会では上宮太子入試対策部長の応援もあった。
⑩ 色々な入試方法の検討（特に中学入試）	A	<p>様々な習い事や体験に励んできた子どもたちの経験や意志力、集中力、継続力などの力を評価し、その活動歴と「自分の好きなこと」を表現する力（＝プレゼンテーション力）、さらには今後の中高生時代の活動への意欲などを評価して、そうした豊かな資質を持つ小学生を迎え入れる、新しいタイプの自己アピール型入試を採用した。しかしながら、エントリー会の参加者が2名であったが、受験生が0名で実施されなかった。今後、検定試験等実施の団体への広報を検討したい。</p> <p>また、昨年度から実施している適性検査型入試での入学者が0名であった。受験生が16名と昨年の48名から激減した。受験生を増加させる方法を検討したい。</p> <p>又、中学校、高校ともに資格取得者（英検、漢検、数検等）の点数化あるいは優遇措置を検討したい。</p>

⑧保健管理

分掌名（ 保健管理 2019年度 ）

評価責任者名（ 蟹山 喜代美 ）

分掌目標	生徒の心身の健康を保持増進させ、問題を抱えこまない環境づくり	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
1. 生徒の定期・臨時の健康診断の計画及び実施	B	各分掌と連携をとり、スムーズに実施することができた。 さらに円滑に実施できるよう検討を重ねる。
2. 既往症について、配慮を要する生徒の把握及び対応の確認	B	既往症からの配慮は多岐にわたり、保護者との対応もさらなる慎重さが必要になった。今後も丁寧に対応する。
3. 学校管理下における救急処置の実施	B	学校管理下における疾病・障害の救急処置は的確・迅速さが求められるので、研修を重ね、ミスのないよう対応する。
4. 性教育及び思春期教室の計画及び実施	B	高校1年対象の講演会を、8月後半に実施する予定である。該当学年団と連携をとり、講演が生徒の心に響くことを期待している。
5. 宿泊を伴う学校行事における生徒への事前指導、関係機関への連絡、配慮を要する生徒への確認及び引率	B	宿泊行事において、アレルギー対策は必須で、旅行会社との綿密な打ち合わせを行っている。
6. AEDの管理（点検・備品購入）	B	以前購入した福田光電の器械の使用期限が切れたので、アルソックにレンタルした。今後定期的な点検も依頼した。新しい器械の説明会を検討している。
7. 健康相談、ヘルスケアシステムの充実	B	学校心療内科医及び産業医など、専門家のアドバイスももらいながら、ヘルスケアシステムを構築していきたい。
8. 独立行政法人日本スポーツ振興センター災害共済給付金の請求と生徒への支払い事務手続き	A	生徒へ還元した給付金は、中学・高校で6,509,179円である。今後も漏れることのないよう適切に手続きを行う。

⑨教育相談

分掌名 (教育相談 2018 年度)

評価責任者名 (伊 藤 隆)

分掌目標	個々人のスキルアップ及び支援体制の確立を目指す。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
①相談業務 ・生徒・保護者へのカウンセリング ・教員へのコンサルテーション ・メールによる関係づくり ・学校への不適応を呈している生徒の把握 (案) →欠席日数のチェック	A	○カウンセリングやコンサルテーションするに当たって、更なる研修・研究を必要とし、それらを実施していく方向である。 ○不登校状態を呈している生徒の把握(案)に関しては、担任・教務との連携をさらに考え、実施していく方向である。	
②学校に行きづらい子どもの「親の集い」	A	○保護者の心理的安定に伴い、保護者の子どもを支援するスキルの獲得が進んでいる。不登校経験者の参加により、保護者の子ども理解が進んでいる。	
③発達の違いを持つ子どもの「親の会」	A	○保護者同士の交流が深まり、子どもを支援するための情報交換が進んでいる。当事者の参加により、保護者の子ども理解が進んでいる。また学習支援や社会的支援を専門にされている方にも参加いただき非常に有意義な時間を持てた。	
④保護者・教職員のための勉強会	A	○外部講師から青少年の自立をテーマに研修を実施し、概ね好評であった。行事が多く、教職員の参加が少ないのは残念である。今年度はLGBTをテーマに講演をいただき、いろいろな性があることを学べる機会を得たことは私たち教員にとって有意義であった。	
⑤教育相談係 HP の活用	B	○HP が開設され、現在のところ相談申込時に利用されているが、今後は活動実施内容や広報を中心に掲載したい。	
⑥広報 ・教職員向け…カンファレンス、「親の集い」、「親の勉強会」「保護者・教職員のための勉強会」といった係活動の認知 ・保護者向け…「親の集い」、「親の勉強会」「保護者・教職員のための勉強会」といった係活動の認知 ・生徒向け…オリエンテーション時における係活動の認知 ・外部向け(案)…「保護者・教職員のための勉強会」の案内を塾を介して上宮に関心の	A A	○教職員向けは職員会議での連絡、保護者向けでは紙媒体だけでなくメール配信により広報ができた。 ○外部向けの「保護者・教職員のための勉強会」の広報は、入試対策部と連携し、近隣の中	

ある保護者への伝達及び近隣の公立小・中学校を介して保護者への伝達		学校に通う保護者へ行った。その結果、3校の学校から数名の保護者が参加された。今後、小学校にも広報の範囲を広げたい。
⑦外部機関（医療、外部相談所など）との連携	A	○面接で医療が必要と思われた方々を連携する医療機関につなげることができた。また Dr からの指示を仰ぎ、学校生活での適応を図った。
⑧保護者会との連携 ・保護者のニーズに応えられる講演テーマであれば「保護者・教職員のための勉強会」での連携が可能	B	○今年度は保護者会の協力を得て保護者会の一部の方の参加があった。
⑨保健管理部門との連携 ・事例の共有化 ・学校精神保健への協働	A	○保健室から2人、係に配属され事例の共有化が進んでいる。今後、さらに学校精神保健の充実に努めたい。
⑩学年会との連携 ・情報の収集 ・不登校や発達の違いのある生徒の担当者会議の実施 ・支援シートの作成	A	○不登校や発達の違いのある生徒を持つ担任との連携は進んでいる。また学年団と連携をし、担当者会議の実施も進んでいる。 ○今年度は13名の支援シートの作成を行った。今後は人権とともに作成に取り掛かりたい。
⑪「不登校を考える会」会報の配布	A	○配布する他、配布した際、教職員から生徒・保護者に関する種々の情報を入手でき、活動に役立てることができた。
⑫大阪私学カウンセリング研究会の業務	A	○平成25年度から30年度とカウンセリング研究会の当番校を6年間、行った。現在の人員、授業時間の多さから業務が滞ることがあるのがあったが無事終了することができた。

分掌目標	学校内外の連絡を調整し生徒・保護者のみならず教職員へのより良い支援を考える		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援が必要な生徒の調査 入学時に提出される「保健管理票」の確認 担任からの情報 保護者からの情報 	A	養護教諭がコーディネーターでもあり、「保健管理票」から該当生徒の抽出を行った。また担任の気になる生徒の情報から支援につなげたケースもあった。教育相談の面接時に成育歴から発達の偏りの疑われるケースもあった。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援シートの作成及び作成後の教科担当者及び保護者へのフィードバック 	A	今年度は13名の支援シートの作成を行った。作成時に保護者へのフィードバックをし、また保護者からも意見をいただくように、双方向で作成することができた。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 外部との連携 	A	医療に繋がっている生徒に対して、Dr. や心理師の指示を支援シートに記載することができた。また本校の校医(山下仰先生)のところで受診している生徒に対しては直接、Dr. から指示を仰ぐことができた。さらに昨年度からあどば一ざー契約をした藤井良美先生との連携を図り、学習指導や社会支援について指導を仰ぐことができた。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援に関する研修 	A	大阪私学カウンセリング研究会で実施する「夏季研修会」ではWISCの解釈、そして「教師の会」では現場でどのように生徒たちに対応するかを学ぶ機会を得た。	

⑩データ処理

分掌名（ データ処理室 ） 評価責任者名（ 西脇圭二 ）

分掌目標	データ処理業務の遂行 入力システムの安定を処理速度の向上 学校業務効率化のためのプログラム開発	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
入力システム、調査書発行システム等のプログラムを更新して使いやすさの向上を目指す	A	今年もバージョンアップできた。
入試業務の遂行 （昨年の web 入試処理の問題点を改善する）	A	円滑に処理ができた。
プレテスト、公開授業、入試説明会の web 申込み作成 （事前の準備シミュレーションを念入りにする）	A	円滑に処理ができた。
通知表を含む考査データ等の担任への配布	A	問題なく終了。

⑪生徒会

分掌名（ 生徒会 ） 評価責任者名（ 堀田 泰彦 ）

分掌目標	学校行事・生徒会業務の内容と効率の見直し。 教員間の連携がさらに取れるようにする。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
生徒会予算の健全化	A	前年度よりも予算の使用状況の改善ができた。	
クラブ活動についての問題点の洗い出し	B	教員数の減少による指導者数については少し進展があった。活動内容には踏み込めていない。	
体育大会の運営の体系化	B	種目の見直し、運営のやり方を多少なりとも見直すことが出来た。次年度へ向けての進める事が出来た。さらに円滑にかつ、安全に実施していきたい。	
文化祭の運営の体系化	B	FAQの作成配布により例年通よりは、担任教諭の規範統一が出来た。さらに内容を吟味し生徒も含め、意識を高めていきたい。	
その他生徒会管轄の業務・行事の見直し ・クラブ紹介の時期及び方法についての再考	B	クラブ予算の早期給付ができるようになった。次年度は4月中に振込める見込み。 クラブ紹介については、考えた結果、次年度より説明の簡素化と時期を早める方向に進めることが出来た。	

⑫人権教育

分掌名（ 人権教育 ）

評価責任者名（ 松野 正淳 ）

分掌目標	共に育む人権（お互いを思いやる気持ちを大事し、共にいたわり、痛みを分かち合いながら歩もう）		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
中学校 1 年人権教育 LHR について、「障がい者問題」「自分の成長を振り返る」等を実施。入学時及び必要に応じて「いじめ」アンケートを実施	A	担当・学年の協力を得てほぼ予定通り実施、PENTA200 の人権ホルダーにて報告。	
中学校 2 年人権教育 LHR について「障がい者問題」「もしもあなたが親ならば」などを実施。必要に応じて「いじめ」アンケートを実施。	B	担当・学年の協力を得てほぼ予定通り実施、PENTA200 の人権ホルダーにて報告。	
中学校 3 年人権教育 LHR について「1 年後の友へ」「男女平等・性差別について考える」などを実施。必要に応じて「いじめ」アンケートを実施。	B	担当・学年の協力を得てほぼ予定通り実施、PENTA200 の人権ホルダーにて報告。	
高校 1 年人権教育 LHR について、入学時「いじめ」についてのアンケート実施。「高齢者問題を考える」「いじめ問題について考える」「障がい者問題を考える」等を実施。	B	担当・学年の協力を得て予定通り実施。PENTA200 の人権ホルダーにて報告。2 月の視聴覚教材を変更。	
高校 2 年人権教育 LHR について、「部落問題を考える」「セクハラ問題について考える」「他民族共生問題を考える」等を実施。歴史的・社会的背景から人権問題を考える。	B	担当・学年の協力を得て予定通り実施。PENTA200 の人権ホルダーにて報告。11 月分を 12 月のセクハラ講演会に変更。	
高校 3 年人権教育 LHR について、「情報化社会と人権について考える」「自己肯定感情の確立を考える」等を実施。現代社会の抱える人権的課題を考える。	A	担当・学年の協力を得て予定通り実施。PENTA200 の人権ホルダーにて報告。	
私学人研 第 4 部会の各例会に参加して各校との連携をはかる。いづれかの分科会に参加して各校の先生方と研修をすすめる	A	『哲学的にみた人権と道徳——人権教育の諸問題』のテーマで本校の人権教育の現状や課題などをまとめる。かなり準備に時間を要す。	
やや形骸化している人権教育の校内組織を見直し、運営する。昨年度やや希薄となった学年の係との連携などを効率的に進める。そのために、係会議を月に 1 回は開催する。	A	教育相談係と共催で、昨今増加している学習障害の問題を、専門家から話していただく。7 月の推進会議でも「部落差別解消法」「起立性調節障がいと不登校」のテーマで係が講演を報告。	
人権教育教職員研修について（5 月・10 月）	B	経験豊富な講師から貴重な話を伺うことが出来た。教員の出席がやや少なかった。	

⑬図書・視聴覚教育

分掌名（図書館・視聴覚教育係）

評価責任者名（ 辻本康夫 ）2018 年度

分掌目標	2018 年度の図書館の分掌目標の第 1 は女子生徒対応の蔵書の増加と女子生徒利用者の獲得にある。第 2 に昨年度はかなり実績を上げたが「図書館マイレージ」の女子生徒のさらなる増加と定着率の増加をめざす。400P を超える女生徒が出たが、さらに上を目指す。第三は「教室に入れない生徒」への対処方法を研究したい。図書館のマナーの普及と機器の充実をめざす。	
重点課題	評価	成果と課題
昨年度以上の貸出冊数をめざす。中高合わせて 7000 冊をめざしたい。	B	中高あわせて 5840 冊だった。特に中学が 7 号館に移動した影響が強く、中学の貸し出しが減ったのが原因と考えられる。
閲覧室内のビデオルームの機器が古く、使用に耐えないものがほとんどであるので、ブルーレイ。DVD に買い替えをしたい。	C	ビデオルーム内のテレビデオが 1 台を除いて故障している。購入後 30 年以上経過しているため。また BDS が使用不可。新規購入
「図書館マイレージ」の参加者の多くが、途中で挫折してしまうので、挫折しない方法を考えたい。特に熱心な生徒が多い女子生徒を如何に盛り上げる事を考える。	B	前年並みの参加者があり、100P 達成者のでたので、よかった。又、参加者、達成者の女性生徒が半分以上を占めている。
昨年度は、図書館では「教室に入れない生徒」を数多く預かり、かなりの生徒が教室に復帰できたが、今年はさらに戻れる生徒を増やしたい。	A	3 年の高校生の女生徒が教室に復帰でき、卒業できた。また中学生の 2 年生が教室に復帰できた。
図書館閲覧室での監視カメラはイタズラの抑止力としても、また盗難などの解決にも効果を発揮しているが、注意深く使用方法を見極めたい。	B	監視カメラのコンピュータが故障したが無事に修理できた。効果的な運用ができたように思われる。
視聴覚教室では特に、イスを固定するネジを外すなどの悪質なイタズラが多い。監視カメラの設置も必要か。	B	ネジの外しは根絶できていない。授業監督ができていないのが原因だろうと考えられる。
視聴覚教室での係教員の終業点検を行っているが、最近パン・ジュースなどのゴミは減っているが、まだイスのイタズラ・忘れ物が多いので使用教員への啓蒙を充実したい。	A	終業点検については、ほとんど問題はない。ネジ外しくらいである。
視聴覚教室の機器の使用方法のマニュアルをさらに使いやすいものに変えたい。へんな使い方、勝手な配線移動が目立つようである。	A	視聴覚機器の使用方法マニュアルを新しいものに作り替えたので、使いやすくなった。

⑭広報戦略

分掌名（広報戦略係）

評価責任者名（相本 秀彦 ）

分掌目標		上宮ブランドを構築し、幅広いフィールドでの広報企画を立案する。	
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
① AR等を利用した「学校案内」（ポスターを含む）等の作成		B	ループリックや経路案内等においてARを利用したパンフレットが作成できた。内容においてはさらに検討していかなければならない。
② web 広告を展開し、フェイスブック、インスタグラムを使った広報の立案		B	グーグル検索において、上宮の掲載順位を上げたり、ジオターゲティングやリターゲティングにおいて、上宮の広告を広く配信できた。
③ 公開授業見学会・プレテスト会の案内チラシについての研究		B	斬新なデザインのチラシができた。公開授業見学会の内容について、もう少しわかりやすく提示する必要があるかもしれない。
⑦ フェイスブックやインスタグラムなどのデジタル広報を企画する		C	HP中のフェイスブックやインスタグラム等を用いての広告展開はほとんどできなかった。
⑧ 新しい広報ツールについて考える		B	GSベアについては検討中。入学希望者のみならず、在校生の満足度を高めるよう保護者会との連携を含めて進めたい。
⑥上宮ブランドの構築。		B	プロジェクトuを中心に上宮ブランドの形はできつつあると思う。今後130周年記念事業についてさらにその形を明確にしていきたい。

⑮ I D

分掌名 (I D 係) 評価責任者名 (山本 直樹)

分掌目標		I C T教材の作成とA L実施に向けての情報収集と実践を行う 教員間での情報の共有を行う	
重 点 課 題		評価	成 果 と 課 題
I C T授業を実施する際のハード面での情報収集を行う。		B	展示会等に参加した。
I C T教材の作成についての情報収集と実践を行う。		B	情報共有してもらうように教科会を開いてもらった。
I C T教材への簡単な移行の可能性を探る。		B	情報共有してもらうように教科会を開いてもらった。 来年度、「みらいスクール」を導入する。
A L実施に向けて実践研究を行う。		B	アクティブラーニング社による監修を受けて、研究授業を行い、それを基に研修会を開いた。
I C T教材の作成等の情報の教員間での共有を行う。		B	情報共有してもらうように教科会を開いてもらった。
A Lの手法等の情報の教員間での共有を行う。		B	教科会で情報共有してもらうように促した。 Find Activelearner の積極的な利用を促す必要がある。
外部の研修や勉強会に積極的に参加する。		B	積極的に参加したメンバーも多い。
多くの先生方がI C T機器を用いて授業が行えるようにI C T機器の整備を行う。		B	新校舎で導入するプロジェクター等の検討を行った。

IV 総 括

上宮学園中学校・上宮高等学校
校長 山縣真平

学 校 経 営 の 基 本 方 針	具 体 的 方 策
<p>本校はこの冊子の冒頭にある「上宮学園中学校・上宮高等学校の教育理念」に基づき、明治 23 年以來、128 年間にわたりその長い歴史を刻んできた。</p> <p>上宮中学校と上宮太子中学校が統合し上宮学園中学校となった。そして、新たな G コースが誕生したが、校祖法然上人の仏教思想を基盤とした「建学の精神」と「教育目標」は不易である。</p> <p>現在進行中の教育改革に対応しつつ、世界史的に見て、稀に見る地球規模での自然環境・政治・経済の激変期をも乗り切れる人材育成をめざして新たな全人教育に取り組む方針である。</p>	<p>学校の教育理念に基づき、各分掌・組織が過去のルーティンワークにこだわることなく有機的に結びつき機能することをめざしたい。そのためには分掌・組織が「建学の精神」と「教育目標」をよく理解した上で、自らの現状を把握・認識して、自ら評価を下し、その反省の上に新たな課題と目標の設定を行うこととなる。</p> <p>全日制普通科の本校は、その制約上毎年度ごとに分掌・組織の大きな人事異動がおこなわれ、よい意味での新年度からのリセット可能である。この作業内容を外部に公表し、保護者や地域の人々に、生徒の成長と教職員の努力等を理解して頂き、学校への信頼を確かなものにしたいと考えている。</p>

総 括（成果と課題）

平成 30 年度は学校評価取り組みに関して、上宮太子中学校との統合による上宮学園中学校と G コースへの移行初年度となった。昨年度実施した中学校の教室を 7 号館へ集約、各教室へのプロジェクターを設置等により、教学の充実と ICT 化を推進した。また、アクティブラーニング社との提携によりアクティブラーニングの教員研修を推進した。

学校の教育理念に基づく各分掌・組織の目標設定が検討・企画され、実施の方向へと進んだ。また、創立 130 周年記念行事の一環として、南グラウンドに新校舎を建築し学習環境中心の南キャンパス、1・2・3・5 号館を取り壊して、グラウンドを整備し、総合体育館と共にスポーツ中心の北キャンパスにという整備計画を策定し、平成 30 年度からの新校舎建設を開始した。

工事により体育授業・クラブ活動の教育活動への影響を考慮し、授業内容の変更、校外における部活動場所と移動手段の確保をおこなった。

中学校においては、英語教育に関して、英語科授業のネイティブ導入が 3 年目を迎え、その成果を問う意味も踏まえて、中学 3 年生実施の修学旅行を、シンガポールでのホームステイを中心とした海外修学旅行とした。英語教育のみならずグローバル教育への展開も含めて、その成果を短長期的に客観的に評価するための取り組みも将来の高大接続を視野に入れながら検討していく必要がある。

また、本校として組織的なアクティブラーニングへの取り組みを継続しつつある。さらに来年度の新校舎完成に合わせて、実質的な取り組みを次年度以降に着実に進めていくつもりである。